

trivia ■皮膚科のトリビア■ 133

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞き取ったことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

魚コラーゲンのI型アレルギーでは、電子レンジで加熱した魚でブリックを行う

第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から(平成27年11月20日)

サケのホイル焼きで膨疹と呼吸苦、アミノコラーゲン入り栄養ドリンクでも膨疹が出現。タラ、ウナギ、ハモでも口腔内違和感が生じた。特異的IgEはサケでclass 5、ブリックテストは生のハモ、タラでは陰性。加熱したウナギで陽性。コラーゲンがアレルギーと考えられる症例のブリックテストは、生だと水に不溶のため陽性とならない。電子レンジで加熱すると、変性して α 鎖がほぐれ、水に可溶になるため、陽性になる。「魚アレルギーの2/3はパルブアルブミン、1/3がコラーゲンである。料理用のゼラチンもコラーゲンだが、こちらはウシまたはブタ由来で、魚コラーゲンとの交叉性はないとのこと。ゼラチンアレルギーは、ウシないしブタコラーゲンアレルギーということになる。ためになった」。

ビールの即時型アレルギーも経皮感作だった

第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から(平成27年11月20日)

ビールを一口飲んだ10分後に口唇の痒みが出現。その後、顔の腫脹、全身の蕁麻疹、呼吸困難が出現した。特異的IgEはビール酵母でclass 2、バクガがclass 5、オオムギも

class 5。ブリックテストでは各社ビールas is, オオムギで陽性。ビールによる即時型アレルギーと診断。ビアレストランでアルバイトをしていて、手にビールがこぼれた時に痒みを感じていたことから、経皮感作による発症と考えられる。

「ビールも経皮感作だった。食物が皮膚につきっぱなしになることを避ける必要があるかもしれない。バリア障害がある人は、食材を素手でさわること自体が、即時型アレルギーを引き起こす危険な行為になってしまうようだ。大豆や米ぬかなど、食物の成分が含まれている化粧品も危なそうである」。

酒皰様皮膚炎の80%がアレルギー性接触皮膚炎を合併していた

第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から(平成27年11月20日)

78例の酒皰様皮膚炎患者。バックグラウンドはステロイド軟膏単独使用例が48例(62%)、タクロリムス単独ないしタクロリムスとステロイド併用例が28例(35%)。Japanese standard allergenを用いてパッチテストを行ったところ、urshiol 17例(22%)、nickel sulfate 16例(21%)、Fragrance mix 13例(17%)が陽性だった。パッチテストの結果と経過からアレルギー性接触皮膚炎と診断できた症例が64例(82%)で、原因の除去を行って酒皰様皮膚炎が改善した症例が57例(73%)あった。

「酒皰様皮膚炎と診断した時点で、アレルギー

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

ギー性接触皮膚炎は否定しまっていたが、確かに、原因除去がうまくいかず遷延している症例も多いのかもしれない。若干多すぎるような気もするが、長くステロイドを塗るきっかけになっている、除去できていないアレルゲンの関与もあるのだろう」。

ブリキの金魚が蕁麻疹の原因だった

第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から (平成27年11月21日)

2歳の女兒。入浴中に出現し、入浴30分後に消褪する膨疹が主訴。ブリキの金魚で遊ぶことを中止したところ、膨疹出現がなくなった。玩具を浸漬して得た溶液とパッチテスト用の金属を用いてプリックテストを行ったところ、玩具溶液とニッケルで膨疹が出現し、陽性で、金属による即時型アレルギーと診断した。

「そういうこともあるのだ、という症例。入浴中に出現するというのがキーポイントだと思うが、ブリキの金魚を疑ったところがすごい」。

H.pylori除菌による発疹は薬疹でないものがある

第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から (平成27年11月21日)

消化性潰瘍に対するH.pylori除菌の発疹症の集計。原因を検討できた8例中、DLST

ではAMPCのみ陽性が5例、AMPCとCAM両方に陽性が3例、PPIは全例陰性だった。内服誘発テストは6例で施行、2例はAMPCで陽性だったが、ほかの4例はいずれも陰性で、DLSTの結果と一致しなかった。薬疹による機序以外の反応がある可能性がある。「1週間の除菌が終わる頃に発症する例も経験する。梅毒のJarisch-Herxheimer反応と同じように、抗菌薬で壊れたH.pyloriがアレルゲンとなって発症している例があるような気がしている。今後の集積に期待したい」。

DIHSの初期には血清TARCが20,000 pg/ml以上に上昇する

第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から (平成27年11月22日)

TARC値の測定はアトピー性皮膚炎の管理上有用であるが、菌状息肉症や水疱性類天疱瘡などでも高値になることが知られ、疾患特異的なマーカーではない。最近、薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の初期に血清TARC値が特異的に異常高値となることが報告された。DIHSの初診時のTARC値は平均で20,000 pg/ml以上になり、ほかのタイプの薬疹や他の皮膚疾患との鑑別にも有用である。「皮膚のダメージを反映するマーカーと認識しているので、当然かも知れないが、発症直後に他のタイプの薬疹や感染症による中毒疹との鑑別に有用だとすれば、案外、役に立つかも知れない」。